

朝のテレビ番組で、エッセイストの斉藤由香さんがお父さんの北杜夫のことを話しているのを偶然見たことがあった。祖父は歌人斉藤茂吉で著名な精神医の斉藤茂太は彼女の叔父さんである。どくとる・マンボウこと北杜夫は、団塊の世代と呼ばれる我々にとつて、新しい時代の文学を感じさせてくれた作家だった。

「ある日、父が突然、映画をつくると言い出し、その資金づくりに株取引を始めた。そして、家庭がめっちゃめちゃになつてしまった」と話していた。私は、本で読んだことのある、ある情景が浮かんだ。「会社にもいろいろなさ事情があるのでしようから」と気使ってくれた北杜夫氏からの葉書を「白きたおやかな峰」のシナリオと一緒にしてタンスの奥にしまい込んだ、不覚にも涙を流す斉藤次男先生の姿である。

山田洋次と同期に松竹映画に入った斉藤次男は寅さん映画などのプロデューサーとして次々にヒット作を世に出していた。エベレスト登山より数倍難しいといわれる、カラコルム登山を小説にした「白きたおやかな峰」は北杜夫も登山医として参加した実話である。「引き返す勇氣」をテーマにしたこの作品は、混乱した戦後から高度成長期に入ろうとしていた当時の日本人に、反省や自戒や希望を与える作品となったはずである。しかし、どこにもでもあるような話しの、ワンマン社長の鶴の一声で「白きたおやかな峰」の映画制作は突然中止になってしまった。

灯台下暗しで、人には近くにいっても知らない事がたくさんある。まして敗北や挫折の経験は知らせる事が大切な事であるが、反面、知られたくない事でもある。だから、はなしそびれてしまうのかも知れない。

システム導入記を書き始めたのは平成十六年の夏で、会社へ入社した自分の息子に、会社が失敗した事やお世話になった事などを書き残しておこうと思つたからにほかならない。それは社員の教育にもなると考え、さらに、お客様にも使つて頂くシステムの歴史を知ってもらうことがさらに良いシステム作りには必要になると考えた。

不思議なことに、父が存命中は太平洋戦争に興味をもつた事がなかったし、むしろ話題にしないで避けていた。しかし、ノートに書いてあつた数ページの「海軍の思い出」と残された「続 江田島の契り」を読み昭和史や太平洋戦争についての基礎知識がない自分に驚いてしまった。それで松本清張、吉村昭、阿川弘之、大岡昇平などを読み、ソフトの歴史物語を書くはずが憑かれたように戦争ものになった。

太平洋戦争が何故起きたのか、終戦時の海軍大臣米内光政が「魔性の歴史」と言つたその歴史の謎は戦いに参加した人々にも明確に答えられるものではなかったらう。

農業や工業の発展段階論からの問題かも知れない、天皇の統帥権に関する問題が事を起したのか知れない、または、昭和恐慌から脱出したい民衆の期待や欲望が渦巻いて拡張主義に走ったからかも知れない。もちろん、軍需産業や教育の問題も当然あったはずである。歴史は繰り返すものである。私達が未来の日本人のためによく研究して、解決しておかなければならない事だと思っている。

何故起きたのかは簡単には答えが出せなくても、何故負けたのかは明確に答えられると思っている。それは科学技術の変化に対応する事に遅れを取ったからである。

変化が一瞬にして起きている事を知らなかった。巨艦巨砲主義は日本海海戦の勝者東郷元帥が長く海軍に在籍し、条約派に対する艦隊派を生み出したことによる産物である。陸軍にも派閥があり、海軍と陸軍はいつも背中合わせの状況にあった。そこに、科学技術の変化を考慮する余地が生まれていなかったからだと思う。

導入記を書きながら、父の同期生で「回天」に乗り込み、昭和十七年にシドニー湾を攻撃し軍神に祀りあげられているお二人のお仏壇に御参りをさせて頂いた。

鹿児島県薩摩川内市鳥丸の中馬兼四の遺族宅は、東郷町市街から数キロは離れた、緑濃い山里の小さな小学校の隣にあった。海兵時代、父と三原の佛通寺に座禅に通った中馬は、卒業後も十二名の同期生達と最新鋭の巡洋艦「利根」に乗り組み、母港の舞鶴や宮津で遊び、わずかな楽しい時間を一緒に過ごした。病気で「ご奉公出来ず」生き残った父はいつも母に「中馬のことを思えば」が口癖であったと言っていた。

熊本県山鹿市の郊外、小さな村の小高い丘にある「松尾敬宇中佐の家」は白い木碑があつたのですぐに訪ねることが出来た。細い曲がりくねった坂道を登って行くと、山つつじのトンネルになっていた。三月であつたがつつじは蕾をつけており、二週間遅く来たならよかつたのか思った。庭には梅や桃などのたくさんの花が咲いていた。姪御さんの家も近くにあり、戦争がなかったならこの桃源郷のようなところに分家して公務員か教師にでもなり生きていたのだろうと思つた。

二人の死は、一年後の昭和十八年に突然に発表され「海軍」と言う本がつくられ、特攻精神の鏡として戦意高揚に利用された。そして、「海軍」を読んだ純真な青年達も多くが、敗戦間近の日本の空や海に「神風特攻隊」として散っていった。

舞鶴編で既に星になつていてと思つていた六十六期の山本卓夫さん(九一才)に監修を頂けたのは望外の喜びであつた。渋谷の郵便局長をしていた山本さんは人名や海軍の組織名などの間違いを訂正して頂いた。山本さんは高齢で漢字が書けなくなつてしたが、必死に思い出して校正をして頂いたとのことであつた。

事不思議・物不思議・心不思議・理不思議を見つけた南方熊楠や華嚴経の四法界から社会の相を見てその変遷を説いた及川古志郎に出会えたのもソフトの仕事に就いていたからだろうと思つている。